

NPO 法人 日本ビオトープ協会
第8回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

◇顕彰委員会委員長の講評：『ビオトープフォーラム in 静岡』（2016年6月3日）にて

今回は7件を表彰させていただきました。本当におめでとうございます。顕彰委員会はビオトープ協会の会長、副会長、委員長、中川顧問などから構成されており、今回も受賞作品を選考いたしました。講評ということでお話をさせていただきます。

◎「ぼてじゃこビオトープ」は、休耕田あるいはため池を利用した形で、市民団体のぼてじゃこトラストが、6個の池にイチモンジタナゴを放流し、貴重な種を増やしています。550匹であったイチモンジタナゴを数千匹くらいまで増やされました。数を増やすだけでなく、ワンパク教室やサツマイモ掘り、虫探し等自然体験プログラムを多数実行され、活動を紹介する冊子も多く作られていることもあり、環境活動推進賞となりました。

◎地域の生きもの保全は企業ベースでは非常に難しいようですが、ダイキン工業滋賀製作所「ダイキン滋賀の森」は、2013年以降敷地内のゲンジボタルを保全する活動を積極的に行い、また周辺の敷地内にある保存樹木群と一体となった緑地整備とその活用が多面的であることを評価いたしました。さらに、役員の方々も率先してこの活動に加わり、ニュースレター等でも活発なPRし、企業のモデルとなるようなCSR活動であると評価させていただきました。

◎甲賀市の「柏市小学校ビオトープ」は、当時の校長先生はじめいろいろな方々が長い間ビオトープの普及、環境教育を熱心に活動されてこられました。時代がどんどん変わっていく中ですが、継続的に行われたということで、積極的に今後とも活用し続けられるような仕組みをぜひ作っていただきたいと思っております。

◎「仙台市富沢遺跡保存館野外展示氷河期の森」は、平成8年以来市民にいろいろな形で環境学習活動等を行ってきており、メダカの保全をはじめとした生き物観察会等いろいろな教育活動を幅広く着実にやってこられたということと、有識者だけではなく、造園の方々や仙台市が連携を取って委員会形式で維持管理を務めている点も高く評価させていただきました。

◎「東京農業大学伊勢原農場ビオトープ」は、私も一度見学にまいりましたが、市の土木事務所や東京農大などにご支援をいただいて、川のビオトープ再生、ホタルの放流等も積極的にされている。この後事例発表がありますが、19回もの研修会を行い河川ビオトープに関する生き物の学習会等学びの場になっており、これから地域の方々にもホタルの見学会等も行う、ということで非常に積極的に活動され、評価させていただきました。

◎豊田鉄工株式会社「トヨタグループの森」は、トヨタグループが積極的に進めております企業ビオトープあるいは生物多様性戦略の代表例として取り上げさせていただきました。特に愛知県に関しましては、緑の回廊や都市の生態系ネットワーク等非常に進んだ取り組みを行政と連携して行っており、その一環としてビオトープ・森づくりということで、工場用地内の用水等の活用を積極的に行っている。企業の敷地内で、一般の方の参加・見学が制限されていますが、これからの展開を期待しております。

◎「創造の森『越中座』ビオトープ空間『婦負の風』」は、北日本新聞社の建物の東側に設けられておりますビオトープで、10年経過し、一つの安定したビオトープになっています。生態系ということでは、カワセミが飛来し、水生植物も繁茂して良好な状態で都会・人々との共生空間です。公共ビオトープは担当者が変わるなど長期間維持するのは難しいところも多いですが、富山では継続的に行われています。都市における公共ビオトープとして、子供たちを巻き込んだ企画、いろいろなイベントが行われています。特に本協会の法人会員が継続して関わってきており、その成果が継続性という点にでていることも顕彰委員会としては高く評価し、ビオトープ大賞となりました。

以上簡単でございますが、各表彰をさせていただきましたビオトープに対し講評させていただきました。

（横浜国立大学名誉教授・前学長、自然環境復元学会会長、協会代表顧問 鈴木邦雄顕彰選考委員長）

◇ビオトープ大賞

（各応募書類より転記）

名 称	北日本新聞 創造の森「越中座」ビオトープ空間「婦負の風」
受賞者	株式会社北日本新聞、株式会社久郷一樹園
【テーマ・概要】	
地方新聞社の新しい工場として企業団地に設置された。「環境と情報技術の共生を目指す、緑の中のITパーク」。越中座の緑地「芝生広場婦負の丘」「屋上ガーデン鶴坂野」「ビオトープ空間婦負の風」から構成され、特に生物多様なビオトープは、周辺の環境との配置にも配慮して、環境学習や、市民が集う場所となっている。	
【整備方針と管理手法】	
<p>施工から9年が経ち、街中にもかかわらずカワセミが飛来したり、カルガモが訪れたりして、地域のかかせぬビオトープとして適正に維持・管理されている。地域の生態系を守る施設として、多くの水生昆虫や水生動物・水生植物が生息。池周辺には実のなる樹木（カキ・ウメモドキ・モチノキ等）が植えられており、水鳥以外にも沢山の野鳥がやってくる。開設以来トンボを始めとする多くの昆虫や水鳥などの小動物の生活の場としての利用や、又貴重な水生植物なども積極的に育成し、地域生態系になくはならない空間となっている。地域にも無料で開放され、自然に包まれた憩いの場所として、又子供達の環境学習の場として広く利活用されている。</p>	



◇審査委員長賞

名 称	トヨタの森
受賞者	豊田鉄工株式会社、株式会社鈴鍵
<p>【テーマ・概要】 ～「まちなかに生き物呼び込む緑の回廊」東の矢作川と西の丘陵地帯を結ぶ～ 『トヨタの森』は旧本社事務所跡地（面積：約 5,400 m²）にあり、豊田市が策定した「豊田市緑の基本計画」で示された一体的市街地誘導ゾーンの中でも重要な緑の環状軸である「緑の内環」に位置している。環境の森づくりを始め、その他環境保全活動による社会貢献を目指す目的で「みんなで作るトヨタの森」をコンセプトに、豊田市の在来樹木を選定し植栽。約 30 種類の樹木苗木 900 本を従業員で植樹を行い、都市部の生態系ネットワークの一端を担うために整備した。また、工業排水を利用した社員の為のやすらぎの空間としてビオトープの創出をした。（滝・小川・河畔林・森）</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 生物、社員の為のやすらぎの空間となるように整備している。広場ゾーン、森林ゾーン、親水ゾーンに分け維持管理。広場ゾーン：広場の草は全面を刈らずに所々刈らない部分を残す。 森林ゾーン：樹木の成長の妨げとなる草の管理。外来植物の駆除《抜き取り》 親水ゾーン：小川の流れを阻害する草の管理。池部の水草の管理。外来生物の駆除。 ※ビオトープ全体の外来種の駆除。 周辺企業路の連携：「企業群が町に自然を呼び込むプロジェクト」 今後は『トヨタの森』に生息する、動植物の生息・生育状況を確認し、今後のビオトープの維持管理やよりよいビオトープにするために生物調査の実施を検討。</p>	



◇技術特別賞

名 称	東京農業大学伊勢原農場ビオトープ
受賞者	東京農業大学 教育後援会・伊勢原農場
<p>【テーマ・概要】 本事業は環境に関する教育向上と伊勢原農場の地域貢献を目指すものである。 蛍の生息環境整備 河川の自然環境の保全活動 伊勢原農場の中央を流れる栗原川の多自然型川づくりを市民、学生、ビオトープアドバイザーが参加して生物の生息に配慮した川づくりの技術と考え方を学びながら 10 年の期間維持管理を行うことで管理手法を学びながら自然の変化を体験していく。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 ビオトープ整備では、地域の自然環境を把握しその地本来の生物相が持続的に循環していく環境を目標とすることが重要である。ホタルが生息する水辺環境では、多様な動植物が生息。河床の構造や護岸の構造等、生息環境に配慮した整備方法を学びながら環境に順応した技術の習得をしていく。砂防指定の河川の為、増水等による河床構造の変化に合わせて維持管理を実施する。 本年放流した結果、蛍の発生を見たので、今後も環境の順応的な管理を行い、さらに成果を挙げたい。</p>	



◇地域貢献賞

名 称	仙台市富沢遺跡保存館 野外展示「氷河期の森」
受賞者	仙台市富沢遺跡保存館
<p>【テーマ・概要】 昭和63年に富沢遺跡において2万年前の人類の生活跡と森林跡がともに発見され、世界的にも貴重な遺跡として注目された。仙台市ではこの貴重な遺跡を保存するとともに、積極的に公開・活用していくこととし、「富沢遺跡保存館」と、発見された樹木などをもとに旧石器時代の植生を復元する「氷河期の森」を一体的に整備。開館から約20年経過し「氷河期の森」は植生復元の役割のほか、環境学習の場としても使用される野外展示となっている。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 「氷河期の森」は池・湿地・草原から構成されており、植生は現在の仙台の植生と異なる2万年前の当地の植生を亜寒帯性針葉樹林を参考に復元している。そのため植物生態調査、植生検討会（有識者や造園業者（委託）、仙台市教育委員会文化財課）を開き、植生を整えている。池・湿地に関してはアメリカザリガニが増殖した経緯をふまえ、外来種の駆除や普及啓発活動をおこなっている。</p>	



◇環境教育賞

名 称	柏木小学校ビオトープ
受賞者	柏木小学校ビオトープ、近江花勝造園株式会社、株式会社ラーゴ
<p>【テーマ・概要】 多様な生き物が生息し、それぞれがお互いに関係を保ちながら生活する環境を保全、復元することを目的とする。自然環境が急激に劣化していく中、人間の暮らす環境として子孫に残していかなければならない。自然を大切にできる場として敷地内の一部を利用して環境保全の大切さを学ぶことができる生きた学習の場として、生徒を中心に地域の方々と共に学校ビオトープづくりに取り組んだ。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 ビオトープ等の専門家の指導を受けて実施。（日本ビオトープ協会（専門造園業者）、自然環境復元研究会、滋賀ビオトープ研究会、みなくち子どもの森指導員、環境NPO） 甲賀市水口町は琵琶湖東部の中流部に位置しており、古琵琶湖層が広がっている（約250万年前の琵琶湖の名残）。当ビオトープでは琵琶湖をイメージした池が整備され、岩山（溪流）から落ちる滝、せせらぎ（小川）、琵琶湖湖岸のような水辺など多様な水の流れを創出し、水辺のあらゆる生き物が棲みやすい環境が整備されている。また、憩いの場として、せせらぎの流水で水辺植生が再現され、この地の昔の原風景を再現。生徒や保護者、教員の方々が生き物を鑑賞できるように観察スペースを設け、未来を担うこどもたちに、かけがえのない自然環境の大切さを肌で感じるための教育設備として整えられている。</p>	



◇CSR（地域の生きもの保全）特別賞

名 称	ダイキン滋賀の森
受賞者	ダイキン工業株式会社 滋賀製作所、近江花勝造園株式会社、株式会社ラーゴ
<p>【テーマ・概要】 当所では企業緑地を活用し、郷土種ゲンジボタルの保全を行っている。活動のスタートに際し、周辺地域を含め緑地の生物調査を行った結果、森や池を有する緑地は里山地域の中央に位置し、田上山系から琵琶湖へと続く緑地や水辺のつながりを強化することで、より質の高い地域生態系の構築することが出来ることが分かった。また保全活動の展開において、意識したのは従業員とのつながりである。外来生物の駆除や竹の間伐、水路沿いの植栽などを、従業員による自主的な活動や社内環境イベントとして実施することで、社内教育も積極的にすすめている。周辺地域とのエコロジカル・ネットワークの形成を進める中で、地域の生物多様性保全の拠点となり、地球環境と地域社会に貢献すべく活動をすすめている。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 既存の森に併設された貯水池の水を利用し、将来的にゲンジボタルが再生産を行うことができる水路を施工した。水路では、幼虫が生息することが出来る水温や水量、護岸の形状、植物帯、夜の暗さの他、餌となるカワニナの生息環境にも配慮した。護岸を蛇行させることで距離を伸ばし、池からポンプアップした水の温度を出来る限り低下させると共に、林内では石組み護岸を採用して安全性と環境の多様性の両立を実現した。また、日当たりの良い水路沿いにはカサスゲやアゼスゲなどを植栽し、水温低下や日陰効果を期待し、生息・産卵場所の創出を行った。導入しているゲンジボタルやカワニナはもちろん、植栽に用いた植物もすべて地域産を使用し、地域遺伝子の保全にも配慮した。</p>	



◇環境活動推進賞

名 称	ぼてじゃこビオトープ（ぼてじゃこ池）
受賞者	ぼてじゃこトラスト
<p>【テーマ・概要】 1. イチモンジタナゴほか貴重種の繁殖保全池として活用 ・2007年4月に琵琶湖博物館の協力のもとイチモンジタナゴ繁殖実験開始（琵琶湖・水質浄化研究センター）し、2年目2008年に増加したイチモンジタナゴの繁殖保管池として、休耕田約300坪を借受け、会員の手づくりで6池制作し、550匹放流、現在数千匹に増加している。 ・滋賀県の絶滅危惧種イチモンジタナゴ、シロヒレタビラのほかメダカなど貴重種の繁殖飼育にも取り組んでいる。 2. ぼてじゃこワンプク塾の自然体験教室のための遊び場所、憩いの場、交流の場として有効活用している。 ・ぼてじゃこワンプク塾の子ども達に、敷地内でタライミニ実験を経験させ、生態系について学ばせている。 ・サツマイモ植え・収穫と食事会、虫探し、カブトの飼育、魚釣りなど自然体験できるプログラムを計画、実施している。 今年度、生き物調査を親子会員7家族中心に実施、優秀な生き物博士が会員に在ることがわかり、素晴らしい「ぼてじゃこ池の生き物たち」の冊子が完成した。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 ・基本制作から日常管理まで会員による手作り管理。・毎年、1～2池を水抜き、泥あげ、土手の改修など改修工事を実施。・雑草刈り、ザリガニ駆除、ウシガエルの侵入、アソラの繁殖対応作業・毎年改修作業（夏原ランド助成金利用）</p>	

